様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３４３０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０４７７

研究課題名（和文）感覚語彙の歴史的変化における構文と意味の相互関係：認知類型論的コーパス対照研究

研究課題名（英文）Inter-relationship between construction and meaning in historical changes of sensory adjectives: a contrastive corpus-based research from a cognitive typological perspective

研究代表者
進藤　三佳（Shindo, Mika）

京都外国語大学・外国語学部・非常勤講師

研究者番号：６０５９３５１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,900,000円、（間接経費）　1,170,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、人間が本来どのように状況を解釈しているかを如実に反映している形容詞カテゴリーに注目し、特に最も基本的な経験である知覚・感覚を起点領域にもつ感覚形容詞を対象とした。
これにより、感覚領域を起点に持つ各形容詞が、人間の日常的身体経験、概念変化に基づいて特徴的に意味拡張しており、それにより統語的側面における、形容詞から副詞・不変化詞へと変化する品詞間変化・文法化がどのように引き起こされるかに対し、認知的な視点からの説明を行った。そして、通時・共時を包括したアプローチや、大規模コーパスを用いることにより、大量の実際の言語使用データに基づく分析という、実証的な取り組みの有効性を示した。

研究成果の概要（英文）：This research focuses on sensory adjectives that etymologically derive from sensation and perception, the most primitive bodily experiences, and extend by significantly reflecting the speaker or writer's way of construing the situation. Sensory adjectives semantically change according to human experiences and conceptual structures; these changes in meaning occur through syntactic and constructional transitions, e.g., from adjective through adverb to topicalized element. This study observes how semantic-pragmatic and syntactic aspects interact beyond apparent syntactic categories, and it provides systematic accounts from a cognitive viewpoint to elucidate the relationship between meaning and syntactic construction. The study also shows the validity of the empirical approach adopted here, using panchronic (integration of the synchronic and diachronic approaches), cross-linguistic (comparison between typologically distant languages), and corpus-based (use of large, balanced data) methods.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：意味論　認知言語学　対照言語学　コーパス言語学　意味変化　文法化　国際情報交流　スウェーデン

１．研究開始当初の背景

（1）認知的視点からの感覚・知覚語彙分析の要請：ある語彙の定まった意味が、時の経過とともに変化していく意味変化・意味拡張の現象は、その表面的な言語現象の根底にある人間の認知メカニズムを反映している。殊に抽象的事物を解釈する際に、人間は自らの身体的経験を用いて概念化しているとされ、感覚・知覚語彙が本来の意味以外に抽象的意味を獲得していく意味変化・意味拡張の現象は、その認知活動を映し出すものとして古くから注目されてきた。本研究の研究代表者は、1998 年から感覚形容詞の意味変化を認知的枠組みから分析し、五感の表現がそれぞれの領域で同じように意味拡張するのではなく、人間のもともとの身体経験を保持しつつ抽象概念へ意味拡張していることを研究してきた。この研究をさらに押し進め、詳細なデータに基づき分析をしていくことは、人間の認知メカニズムのさらなる解明につながると見込まれる。

（2）対照言語学的視点からの研究要請：さらに認知的アプローチからは、個々の語彙だけでなく構文それ自体に意味があり、構成要素の語彙に還元できないものであるとする構文文法論が提唱されるようになった。各語彙の意味は、その使用される統語環境によって発現される。従って、意味分析をその使用される構文と切り離して論じることはできないと考える。本研究では、広くさまざま文法形式を持つ多様な言語に応用可能なラディカル構文文法(Croft 2001)の枠組みにおいて、意味分析を行う。特に日本語は、世界を二分する VO 言語、OV 言語のうち、欧米の言語と類型論的に全くの対極にある OV 言語に属し、統語的に非常に異なっている。そのため、認知的・感覚的領域を同一にした場合の対照データとして、各国からの日本語研究の要請が高い。本研究において、日本語を支点として他の言語との比較をし、世界に研究結果を発信していくことは、対象言語学的研究として、意義の高いものである。

（3）コーパスを用いた研究への要請：言語学においても他の自然科学と同じく、再実験可能な証拠を挙げて論じるという実証主義の考え方が浸透してきている。その際に必要不可欠となるのが、言語資源を集めた大規模コーパスの利用である。各国において近年大規模なものが構築され、利用が可能になってきている。これを用いて、人間が共通に持つ、感覚・知覚経験を表す語彙の分析をすることにより、認知能力の発現の仕方、その言語による差異を分析する。そこで本研究でも、日本語と他の多数の言語とを比べ、意味に及ぼす統語環境の影響を分析していく。

（4）通時的研究への要請：もともと具体的経験である感覚・知覚語彙の意味の広がりを分析する場合、共時的データのみを分析するのは連綿と続く意味変化を切った一つの切断面を見ているに過ぎない。真にダイナミックな言語の様相を分析するためには、その通時的意味変化を時系列的に観察しなくてはならない。本研究ではそのために歴史的コーパスからデータを取り、時代ごとの変化を追う。

２．研究の目的

（1）本研究の目的は、感覚・知覚語彙の意味変化を、対照言語学的・通時的にコーパスデータを収集し、認知的・構文文法的枠組みにおいて、意味の拡張のさまとその統語環境の相関関係を分析することにより、語彙の意味変化に認知的基盤がどのように影響し、統語環境がどのように作用するのかを明らかにするものである。具体的には、日本語・英語・韓国語・ロシア語・スウェーデン語・チェコ語の 6 つの言語について、触覚、味覚、臭覚、聴覚、次元、視覚の 6 つの感覚領域の感覚形容詞を対象とする。さらに、多数の言語を包括するこのような実証的コーパス分析の手法を確立し、国内のみならず世界に発信・共有することが目的である。

（2）共時的研究、通時的研究は、通常これまでそれぞれ別個になされてきた。特に通時的研究は、各研究者が一つのテキスト、作者に特化して研究を続けることが多かった。（例えば、チョーサー、源氏物語など。）本研究では、コーパス言語処理の手法を用い、各テキスト・作家・時代を越えて、言語の変遷を分析する。また、意味分析と統語分析においても、本研究では、個別に独立したものとみなさず、双方があいまって伝達内容を伝えることができると考える。このような学術的枠組みを取ることによって、統語構造の違う言語間の比較を可能にする。他の言語、他の時代と比較しながらことばの変遷を分析することにより、意味と統語構造との関係、人間の認知能力の発現の仕方を探ることを目的とする。

（3）詳しく意味と構造との関係を調べるため、本研究では、語彙の分析を行うと同時に、日本語コーパスの時系列的な標準化を行う。英語をはじめとする欧米諸語においては、大規模コーパスが競って編纂され活用されている。日本語においては、現代語はコーパス化が進んでいるが、古語については、これまでの国語学の伝統から、テキストごと、筆者ごと、時代ごとに集録がなされている。しかしこのシステムのままでは、テキスト縦断的な分析に非常な労力がかかり、バランス化が行われていないため、データ収集の信頼性を得ることが難しく、言語研究者が使いにくい。そこで、University of Virginia Library, Japanese Text Initiative の日本語データベース、人間文化研究機構の国文学研究資料館

「日本古典文学大系」（旧版）データベース等を用い、時系列的な標準化を行う。これにより、日本語と欧米諸語との対照・比較が真に可能になると考える。

３．研究の方法

（1）本研究の研究代表者は、2005 年に現代英語の大規模コーパスに含まれるすべての形容詞を対象として、形容詞の限定用法と叙述用法それぞれについて、その修飾・叙述している名詞に注目し、名詞をシソーラスによって自動的に分類することによって、2 つの語彙の意味の差異を分析するシステムを提案した。(内元・進藤他 2005 登録済特許　第 4803709，登録済国際特許　Patent No. US8010342 B2)このシステムにおいて利用した統語情報は、現代英語における形容詞-名詞の文法関係であったが、本研究ではさらに、形容詞の出現する構文とその意味との関係を分析する。

（2）具体的には、日本語・英語等の異なる言語について、現代コーパス・歴史的コーパスからその意味と統語情報の出現データを収集し、対照言語学的・通時的に分析する。その言語間の違い、意味・統語の変遷について、認知的視点から説明を加えることによって、意味と統語構造の関係、人間の認知能力の発現の仕方を探る。

４．研究成果

（1）研究代表者は 2005 年頃より、触覚、その代表である温度感覚について、統語構造の違う多数の言語間の比較を目的とする研究を、本課題の海外研究協力者であるストックホルム大学（スウェーデン）の Maria Koptjevskaja-Tamm 教授と行ってきた。2010 年 3 月に、本教授の主催するワークショップ“Temperature in Language and Cognition”において研究発表し、そこで発表された多数の言語における温度表現に関する論文を収録した論文集の出版を企画した。内部査読、外部査読のプロセスを経て、一部書き直し条件付きで採択され、研究協力者と更なるデータ収集・分析、理論的説明付けに関する数度の改訂、全体調整を行った。広く 20 以上もの言語における温度に関する論文を収録した本として、John Benjamins から 2014 年度中に出版予定である。

（2）視覚形容詞の通時的変化について、日本語と英語の歴史的コーパスから大量にデータを入手し検証を行うことによって、通時的な統語構造の変化と意味の変遷の関係を、言語を越えて統合的に分析した。この分析結果は、順次対象データ・分析方法を変えて、2011 年 7 月に ICHL-20、2012 年 7 月に NRG5、2013 年 6 月に ICLC-12 の各国際学会において発表した。日本語においては、11 世紀には物理的な明るさを示していた形容詞が、13-15 世紀には、感情的・知的な意味を表すようになり、19-20 世紀には話者の主観的な判断が入るようになる意味変化を示している。そして、それに伴う統語構造的な変遷を、通時的な量的データを分析することにより示した。また、英語においても同様の意味変化が起こるが、その統語構造的な品詞間の推移が異なることを示した。

（3）研究代表者・研究分担者ともに、認知言語学の概論書の執筆を行った。研究代表者は、認知的に重要な概念である「主観化」に関して、種々の参考文献を挙げ、その概念の意味するところ、関係する言語現象等を論じた。研究分担者は、ネットワーク分析、構文文法、フレーム意味論、意味地図、大規模コーパスなど、認知言語学の最新の研究成果や分析手法を取り入れて論じた。今後の理論の発展、後進の育成に役に立つものと思う。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　5 件）

① Shindo, Mika. “Subdomains of temperature concepts in Japanese.” 論文集 Linguistics of Temperature (John Benjamins Publishing Company). 査読有. 2014(掲載確定). pp. 1-36.

② 進藤三佳. 「主観化」 論文集『講座　言語研究の革新と継承　第 6 巻』（ひつじ書房）. 査読無. 2014(掲載確定). pp. 1-35.

③ 李在鎬. 「第 4 章　認知語彙論、第 5 章総括と展望」　論文集『認知日本語学講座第 2 巻　認知音韻・形態論』(くろしお出版). 査読無. 2013. pp. 141-191.

④ 李在鎬.「文章の難易度と語彙の関連性に関する考察」論文集『コーパスとテキストマイニング』(共立出版). 査読無. 2012. pp. 181-193.

⑤ 進藤三佳・李在鎬・渋谷良方. 「感覚形容詞の語用論的意味変化に見る統語構造の影響」論文集『日本語用論学会　第 13 回大会発表論文集』査読有. 2011. pp. 57-64.

〔学会発表〕（計　5 件）

① Shindo, Mika. “Emergence of modal meanings in adjective/adverb categories: A contrastive analysis from English and Japanese.” The 12th International Cognitive Linguistics Conference (ICLC12). 2013. 6. 13.

University of Alberta, Edmonton, Canada.

② Shindo, Mika. “Development of constructions across grammatical categories: A cross-linguistic approach from Japanese.” New Reflections on Grammaticalization Ⅴ. 2012. 7. 16. University of Edinburgh, Edinburgh, Scotland (U. K.).

③ 李在鎬・進藤三佳. 「決定木に基づく多義語分析:「明らか」を例に」 言語処理学会第18回年次大会. 2012. 3. 13 (チュートリアル), 15. 広島市立大学.

④ Shindo, Mika. “A Cross-linguistic study of constructionalization of adjectives in English and Japanese.” The 20th International Conference on Historical Linguistics (ICHL 20). 2011. 7. 29. National Museum of Ethnology, Osaka, Japan.

⑤ 進藤三佳. 「状況描写的意味から強調的意味への主観化・文法化」 第83回日本英文学会全国大会シンポジウム『認知的視点から見た言語変化と共時的多義』2011. 5. 22. 北九州市立大学.

６．研究組織

(1)研究代表者

進藤　三佳（SHINDO, Mika）
京都外国語大学・外国語学部・非常勤講師
研究者番号：60593514

(2)研究分担者

李　在鎬（LEE, Jae-Ho）
筑波大学・人文社会系(留学生センター)・准教授
研究者番号： 20450695

(3)海外研究協力者

Traugott, Elizabeth Closs
アメリカ・スタンフォード大学・言語学科・名誉教授

Koptjevskaja-Tamm, Maria
スウェーデン・ストックホルム大学・言語学科・教授